

4

皮膚疾患に対する 中医学の診断方法

ポイント

- 弁病と弁証を合わせる。できるだけ弁病を行ってから弁証をする。
- 皮膚疾患は発症・転化・予後についてそれぞれの特徴がある。弁病の目的は皮膚疾患の特徴を把握し、他の疾患との鑑別診断を行うためである。
- 皮膚症状の特徴を覚え、中医学理論に基づく証の属性を判断することが必要である。
- 中医学による皮膚疾患の弁証は、病名診断よりも発疹の性質を判断することがより重要である。

1 皮膚疾患の診断と治療のステップ

中医学で皮膚疾患の診断と治療をする際には、図 10 に示すような手順で進めるが、いくつかの要点を押さえておきたい。

まず、皮膚の症状をよく見ることである。病変の色・乾燥の度合い・浮腫の有無・滲出の度合いなどは、邪気の性質を判断するために欠かせない要素である。(24 頁、「3 皮膚疾患の症状と皮疹の分類」を参照)。例えば、発疹の色は赤いほど邪熱の度合いが強くなる。滲出・浮腫が目立つならば湿邪の影響が大きい。膨疹・発疹が出たり消えたりするなら風邪の関与が考えられる。発疹が硬く苔癬化し、角質の増殖が目立つ場合は気滞血瘀の影響が考えられる。掻破痕を比較することによって瘙痒の変化も捉えることができる。

次に、よくみられる証型を押さえるようにする。临床上よくみられる炎症性皮膚疾患の多くは、紅斑・浮腫・滲出・水疱・膿疱などの症状を伴っており、血熱・湿熱・熱毒の証が多い。清熱利湿・清熱涼血・清熱解毒の方法がよく用いられるが、患者の体質も考慮して加減をしながら治療を行う。

中医学による皮膚疾患の治療では、内服・外用法とスキンケア・生活養生の併用が有効性を上げる重要なカギとなっている。また、患者自身も積極的に治療に加わることも重要である。自ら体質を調整・強化したり、美肌作りをしたりすることによって皮膚のバリア機能を強化し、再発を予防し、QOL を向上させる。

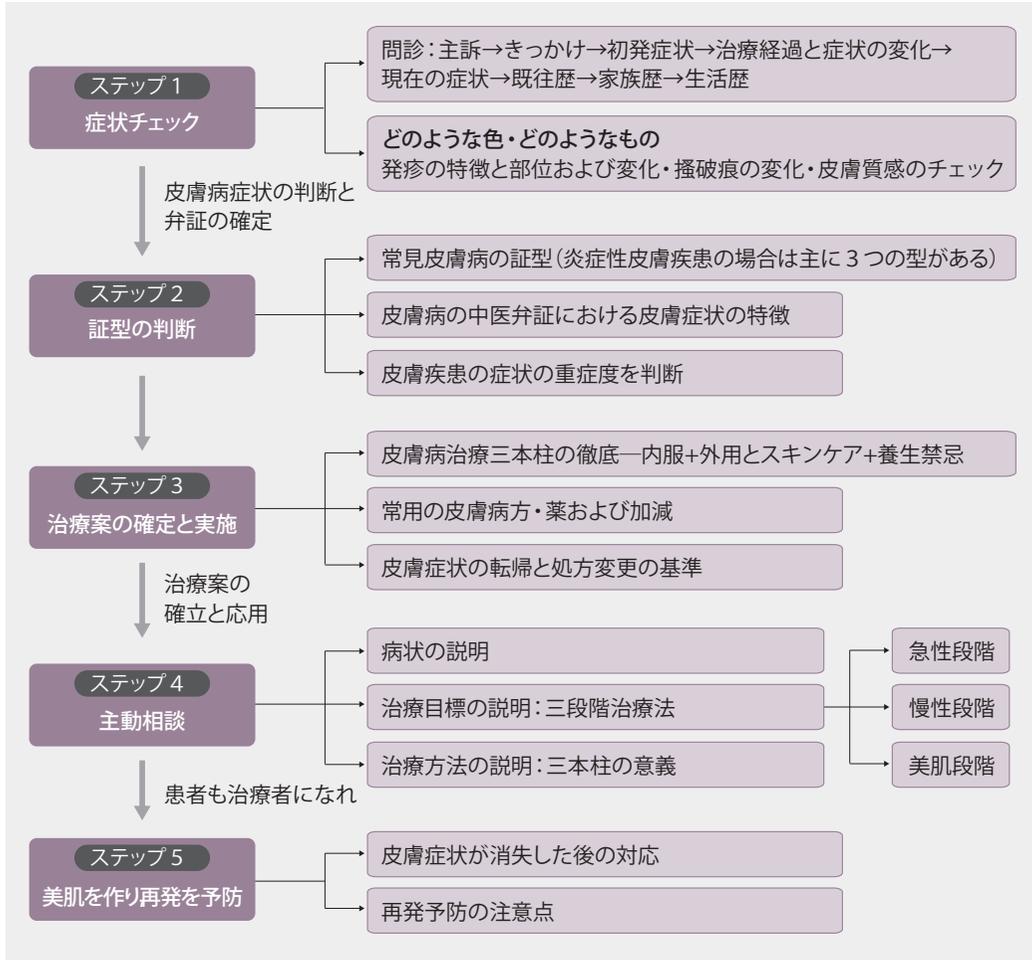


図 10 皮膚疾患の診断と治療のステップ

2 皮膚疾患の四診のポイント

1 問診

表8の「十問歌」を参考にして行おう。主訴→きっかけ→初発症状→治療経過と症状の変化→現在の症状→既往歴→家族歴→生活歴の順に聞いていく。子供の場合は親からできるだけ多くの情報を得るようにする。

- 主訴：主要症状と期間、いつ、どの部位から発症したか。
- 現病歴：疑わしい誘因または原因、初発症状の特徴、いままでの治療経過、使用した薬の種類（特にステロイド・プロトピックなどの使用状況）、治療中の変化など。
- 現症：現在の皮膚症状はどのようなものか（発疹の種類・色・形状・分布など）。痒み、その他の自覚症状、全身症状のチェック。

- 既往歴：アレルギー性疾患またはアレルギー体質傾向があるか。他の疾患に罹っているか。
- 家族歴：家族に類似の症状を呈した者はいないか。
- 生活歴：職業・嗜好品・食習慣および生活習慣・常用している化粧品の種類など。
女性の場合は、月経について確認（月経前後の皮膚症状の変化も含む）。

表8 十問歌（『景岳全書』伝忠録・十問篇）

一問	寒熱を問う（寒熱・のぼせ・冷えなど）
二問	汗を問う（自汗・盗汗・部位・汗の質や色など）
三問	頭身を問う（頭・四肢など。頭痛・めまい・体の痛み・だるさ・しびれなど）
四問	便を問う（下痢・軟便・便秘など）
五問	飲食を問う（食欲・偏食・食べものの好き嫌いなど）
六問	胸腹を問う（胸・脇・腹の痛みや張りなど）
七問	聾を問う（耳：耳鳴り・難聴など。目：めまい・かすみ目・ドライアイなど）
八問	渴を問う
九問*	脈色により陰陽を察する
十問*	気味により神見を明らかにさせる

*後世は九問に旧病，十問に病因，さらに婦人病・小児病を問うべきであるとしている。

2 望診

どのような色（発疹の色）のどのようなもの（発疹の種類・形・分布）かを把握する。

- 色調：皮膚色（赤・白・褐色・黒など）。
- 大きさと形。
- 数と配列の特徴：単発か多発か，線状・環状・蛇行状・不規則など。
- 硬さ。
- 表面の性状：平滑・ドーム状・境界の明確性・陥凹など。
- 部位：露出部・被覆部・顔面・頭部・体幹・四肢・対側性など。
- 経過：急性・慢性・再発など。
- 搔破痕。
- 患部以外の正常な皮膚部位も観察する（潤い・色・滑らかさなど）。
- 舌診は中医診断学の舌診の内容に準じて行う。

3 切診

皮膚温度の変化や皮膚質感のチェックを行う。

- 発症部と周辺部との皮膚温度の比較。
- 発症部以外の皮膚の質感のチェック。
- 紅斑を指などで押したとき，色が抜けない場合は皮膚に出血があると判断できる（血熱が多い）。